

独立法人となる大学

海野 和三郎（東京大学名誉教授）

大学は生き物で言えばサンゴ礁に似ている。グローバリゼーションの怒濤がやってきたので、行政は公務員を形式的に削減するために国立大学を独立法人にすることにした。サンゴ礁をコンクリートで固めて一時しのぎの防波堤にするわけである。私立大学はもともと会社的な運営がなされていたから大きな変化はない。

しかし、東大の小宮山副学長は「日産にゴーンさんが来て経営がよくなったというのは全然違う。だが、助手以上で4200人いる東大は、その分野でトップだと思って、それぞれにやっている」（朝日新聞7・16）という。サンゴのような生き物の群体という性格を殺してはいけないということである。勿論、国家的プロジェクトとも言うべき大型研究計画も多々ある。そういう大型プロジェクトや実業に直結した分野では、予算・人事の自由度が増すメリットがあるという皮算用もある。東大、京大、東北大などは国家プロジェクトと産業プロジェクトを看板にして、生き延びる手段を講ずることもできるであろう。だが、サンゴ礁の本来の役割はサンゴのポリプが藻類と共生して光合成でプランクトンから魚類にいたる生物を養い、海の森林として地球環境を保全する生き物としての働きである。コンクリートで枠をはめられた中で、ポリプが自由に生育できるかが心配である。「基礎研究は、短期間でうまくいくかどうかかわからず、金にもならない。予算を減らされ、切り捨てられる部分がでてくるのではないか」東大理学系大学院の岡村定矩研究科長は心配する。「地方の大学はもっと厳しいのではないか」。（朝日新聞7・13）恐らく厳しいどころの沙汰ではあるまい。

よくノーベル賞30個取るのを目標にするとかいう話を聞く。小柴さん、田中さんらのおかげで、そんなことで圧力をかけてくる声もいくらか下火になったようであるが、ノーベル賞のある学問領域は少数であり、物理や化学についてさえ、ノーベル賞の出やすい領域は極めて限られる。ノーベル賞30個を目標とするような法人化では、肝心の文化を守り創造するサンゴ礁としての大学は死滅しかねない。

具体的には、教育や研究を助成するための校費、研究費の総額及び内訳に法人化がどう影響するかである。これまでは、校費の中にも教官一人当たりの研究費もあり、科学研究費にも総合研究、基盤研究もA、B、Cなどの各種、奨励研究などあった。「すばる」の建設などは研究費とは言わず、多分特別事業費というような名前の費用であろう。そうした違った名前の予算配分が今後どうなっていくかが問題であるが、ここでは、生きたサンゴのポリプのような研究者、自分がその分野でトップだと思っていたり、自分しか興味のないことを一生懸命研究する人、そんな研究者がこれまで以上に住みやすくなるような環境が整えられるかどうかを最大の課題として提起したい。

第35巻4号 2003年11月25日発行

編集：

柴橋博資（天文学専攻）shibahashi@astron.s.u-tokyo.ac.jp

牧島一夫（物理学専攻）maxima@phys.s.u-tokyo.ac.jp

佐々木晶（地球惑星科学専攻）sho@eps.s.u-tokyo.ac.jp

武田洋幸（生物科学専攻）htakeda@biol.s.u-tokyo.ac.jp

田中健太郎（化学専攻）kentaro@chem.s.u-tokyo.ac.jp

鈴木和美（庶務掛）ksuzuki@adm.s.u-tokyo.ac.jp

岸眞千子（庶務掛）kishi@adm.s.u-tokyo.ac.jp

HP担当：

名取 伸（ネットワーク）natori@adm.s.u-tokyo.ac.jp

HP & 表紙デザイン

田中一敏（ネットワーク）kazutoshi@adm.s.u-tokyo.ac.jp

印刷・・・・・・三鈴印刷株式会社